

管内ロボット搾乳農家の実践と家保の取組：長野県

飯田家保 常田将宏

管内 A 農家は 2000 年に搾乳ロボットを導入。2018 年 9 月の 1 日 1 頭当たり乳量は平均 40.9kg だった。A 農家から搾乳ロボット運用状況の聞き取りを行うとともに、家保で 2014 年から 2018 年に行った個体乳汁及びバルク乳細菌検査結果を分析、ロボット搾乳の特性を調査。A 農家では搾乳時データから体細胞数の多い個体を発見、家保の個体乳汁細菌検査結果を基に処置を決定。分離菌は環境性ブドウ球菌 (CNS)、環境性連鎖球菌 (OS) が多く、また菌が分離されないことも多かった。バルク乳検査では黄色ブドウ球菌等はほぼ分離がない一方、CNS、OS は管内平均を超える場合が多かった。これらの結果に基づき、家保は搾乳機器のふき取り検査等を実施、消毒方法を指導。ロボット搾乳は長所に労働負荷と時間の低減、注意点に搾乳時データの積極的活用、牛の観察の励行、複数人での飼養管理が挙げられ、その特性を踏まえた農家の実践と家保の支援が酪農経営に大きく寄与すると考えられた。